

<業界レポート> 世界の化学肥料に関する基本データ（2024年版）

(2025年5月23日作成)

肥料業界関係者および農業従事者の方々にとって、化学肥料に関する基本データは間違いない肥料生産と供給、需要と価格の変動を把握するに最も重要な情報の一つである。著者もそのことを身に染みるほど感じている。本レポートは著者が2024～2025年に収集した世界の化学肥料生産能力、生産量、消費量と貿易量などのデータを元に作成したものである。読者の皆様に役立てば、それに越したことはない。

本レポートに掲載されているすべてのデータは著者が収集した情報をベースに纏めたものである。著作権フリーで、使用は自由である。なお、情報のソースはFAO、IFA、各国の農業を管轄する官公署と税関、大手調査機関などが公開した資料で、信頼性がある。

一、世界の耕地と主要作物生産量のデータ

作物は土壤から窒素、りん酸、カリなどの養分を吸収して生育するので、土壤中の養分が不足すると、作物の収穫量と品質が落ちる。収量と品質を維持するために、外部からこれらの養分を含む資材、いわゆる肥料を投入する必要がある。化学肥料は高濃度の養分を有するもので、土壤養分の補充に最適である。

化学肥料は農地に施用するもので、その需要量と実際の消費量は耕地面積と密接な関係がある。基本データとして、世界の耕地面積と主要農産物生産量を知る必要がある。表1は2013～2022年世界耕地（牧草地と永年作物、例えば果樹などを栽培する農地を除外する）の面積および農業（畜産と水産を含む）従事者の人数を示す。

表1. 2013～2022年世界の耕地面積と農業従事者のデータ

年度	耕地面積（万ヘクタール）	農業従事者（万人）
2013	137,970.0	92,048.5
2014	138,127.1	90,362.4
2015	138,464.0	89,201.3
2016	138,589.7	88,540.6
2017	138,714.3	87,822.8
2018	138,682.4	86,828.6
2019	138,253.3	86,342.9
2020	138,424.6	86,812.2
2021	138,503.4	88,033.1
2022	138,383.6	89,009.0

データ出所： FAO

2013~2022 年の 10 年間、世界の耕地面積は 13.8 億ヘクタール台を維持しているが、農業従事者が逐年減少していく。これは経済発展に伴う農業機械の普及と化学肥料の使用増など、一人の農家がより多くの耕地を耕すことができるようになった。ただし、2021~2022 年は新型コロナウイルスパンデミックの影響で、一部の地域がロックダウンされ、農村に回帰した人々があり、農業従事者が久々増加に転じた。

表 2 は 2022 年耕地面積トップ 10 ヶ国と農業従事者人数トップ 10 ヶ国を示す。

表 2. 2022 年耕地面積（万ヘクタール）トップ 10 の国と農業従事者（万人）トップ 10 の国

順位	耕地面積トップ 10 か国			農業従事者トップ 10 か国		
	国名	耕地面積	農業従事者	国名	人数	耕地面積
1	インド	15,444.8	22,605.8	インド	22,605.8	15,444.8
2	アメリカ	15,159.2	266.6	中国	16,930.3	10,787.2
3	ロシア	12,164.9	402.8	インドネシア	3,904.3	1,794.1
4	中国	10,787.2	16,930.3	エチオピア	3,623.7	1,640.0
5	ブラジル	5,564.2	861.9	パキスタン	2,712.2	3,023.0
6	アルゼンチン	4,309.9	142.2	ナイジェリア	2,680.9	3,687.2
7	カナダ	3,834.6	25.7	バングラデシュ	2,606.2	787.8
8	ナイジェリア	3,687.2	2,680.9	タンザニア	1,920.2	1,350.3
9	ウクライナ	3,292.4	274.5	コンゴ	1,860.6	1,494.9
10	オーストラリア	3,126.5	30.0	ベトナム	1,842.8	675.4
合計		77,370.9	44,220.7		60,687.1	40,684.7
世界全体に占める割合		55.91%	49.68%		68.18%	29.40%

データ出所： FAO

註：ウクライナ農業従事者の 2022 年データがないので、2021 年のデータで代用する。

世界には 190 以上の国と地域があるが、耕地面積トップ 10 ヶ国だけが世界耕地面積の 56%を占め、農業従事者的人数も全体のほぼ半分を占める。一方、農業従事者人数トップ 10 ヶ国は農業従事者が世界全体の 2/3 以上を占めているが、所有の耕地面積が世界全体の 30% しかない。即ち、一部の経済大国（アメリカ、ロシア、カナダ、オーストラリア）は同時に農業大国でもあり、農業機械化のレベルが高く、少人数で多くの耕地を耕し、多くの農産物を収穫することができる。一方、発展途上国は概して農業が主産業で、農業従事者が多く、一人当たりの耕地面積が少ない。

表 3 は 2019~2023 年の 5 年間世界主要穀物と油料作物生産量のデータ、表 4 は 2023 年世界の穀物生産量トップ 10 ヶ国、表 5 は 2023 年世界の油料作物生産量トップ 10 ヶ国を示す。

表 3. 2019～2023 年世界の穀物と油料作物生産量

年度	穀物生産量（万トン）				油料作物生産量（万トン）			
	小麦	コメ	トウモロコシ	合計	大豆	菜種	落花生	合計
2019	76,327	75,549	113,692	265,568	33,619	7,183	4,925	45,727
2020	76,014	77,511	115,492	269,017	35,587	7,238	5,405	48,230
2021	77,462	79,082	120,469	277,013	37,271	7,188	5,457	49,916
2022	81,138	78,893	116,212	276,243	35,370	8,689	5,505	49,564
2023	79,898	80,000	124,156	284,054	37,117	9,187	5,427	51,731

データ出所： FAO

表 4. 2023 年世界の穀物生産量トップ 10 の国とその生産量（万トン）

順位	小麦		コメ		トウモロコシ	
	国名	生産量	国名	生産量	国名	生産量
1	中国	13,659.6	インド	20,672.7	アメリカ	38,969.4
2	インド	11,055.4	中国	20,660.3	中国	28,884.2
3	ロシア	9,150.0	バングラデシュ	5,861.3	ブラジル	13,195.0
4	アメリカ	4,931.4	インドネシア	5,398.1	アルゼンチン	4,140.9
5	オーストラリア	4,119.9	ベトナム	4,349.8	インド	3,808.5
6	フランス	3,599.6	タイ	3,307.1	ウクライナ	3,103.0
7	カナダ	3,195.4	ミャンマー	2,565.0	メキシコ	2,755.0
8	パキスタン	2,816.1	フィリピン	2,006.0	インドネシア	1,998.6
9	トルコ	2,200.0	パキスタン	1,480.4	ロシア	1,660.0
10	ウクライナ	2,162.5	カンボジア	1,290.0	南アフリカ	1,643.0
10 か国合計		56,889.9		67,590.7		100,157.6
世界生産量に占める割合		71.20%		84.49%		80.67%

データ出所： FAO

小麦、コメ、トウモロコシ生産量のトップ 10 ヶ国がそれぞれ世界当該作物の 70～85% を生産している。アフリカ諸国は南アフリカがトウモロコシ生産量の 10 位に出ただけで、食糧生産の偏在が明らかである。これはアフリカの一部の国が常に食糧不足に陥る原因である。

表 5. 2023 年世界の油糧作物生産量トップ 10 の国とその生産量（万トン）

順位	大豆		菜種		落花生	
	国名	生産量	国名	生産量	国名	生産量

1	ブラジル	15,214.4	カナダ	1,832.8	中国	1,923.1
2	アメリカ	11,334.3	中国	1,631.7	インド	1,029.7
3	アルゼンチン	2,504.5	インド	1,264.3	ナイジェリア	430.2
4	中国	1,949.8	オーストラリア	891.8	アメリカ	267.2
5	インド	1,498.5	フランス	427.7	ミャンマー	178.6
6	パラグアイ	1,019.7	ドイツ	421.8	セネガル	149.3
7	カナダ	698.1	ロシア	419.6	スーダン	138.6
8	ロシア	660.0	ウクライナ	418.4	ギニア	100.0
9	ウクライナ	474.3	ポーランド	357.5	アルゼンチン	96.3
10	ボリビア	367.0	アメリカ	189.5	ブラジル	87.5
10か国合計		35,720.6		7,855.1		4,400.5
世界生産量に占める割合		96.24%		85.50%		81.06%

データ出所： FAO

油料作物の生産がさらに偏在している。生産量上位 10ヶ国がそれぞれの世界当該油料作物生産量の 81~96%も占めている。特に生産量の一番多い大豆はトップ 5ヶ国だけで世界生産量の 90%を占めている。

通常、穀物（小麦、コメ、トウモロコシ）は窒素を多く吸収し、りん酸と加里もある程度必要であるが、油料作物（大豆、菜種、落花生）はりん酸と加里を多く吸収するが、窒素固定作用を有するため、必要量が少ない。例えば、小麦やトウモロコシのような食糧作物は窒素とりん酸、加里の需要量が大体 5:2:2 で、窒素の需要が多い。大豆や落花生のような油糧作物は逆に 3:5:3 でりん酸が多く必要とする。野菜中の葉菜類は窒素が多く必要で、りん酸と加里が少なくても問題にならないが、果菜類や豆類など葉菜以外の野菜は逆にりん酸と加里が多く必要である。従って、農作物の種類により、必要な化学肥料の種類と量も異なる。

次に挙げる化学肥料の生産能力と消費量、輸出／輸入に関するデータでは、穀物生産量と油料作物生産量の多い国ほど化学肥料生産量または消費量も多くなる傾向がみられる。

二、 化学肥料の原料に関するデータ

窒素は大気の主成分で、大気の約 78%を占めているが、植物が大気中の窒素を吸収利用できない。窒素肥料は微量の天然硝酸ナトリウム（チリ硝石）を除き、すべて天然ガス、石油または石炭を原料にして合成されたアンモニアから作られたものである。また、りん酸肥料はすべてりん鉱石から、加里肥料も 80%以上が可溶性加里鉱物、約 20%が加里を含む塩湖鹹水から作られる。すなわち、化学肥料の原料は大きく分けると、窒素肥料はアンモニア、りん酸肥料はりん鉱石、加里肥料は可溶性加里鉱物と鹹水である。

表 6 は 2020~2024 年世界のアンモニア生産量、りん鉱石採掘量と加里生産量のデータ

である。

表 6. 2020～2024 年世界のアンモニア生産量、りん鉱石採掘量と加里生産量（万トン）

項目	2020 年	2021 年	2022 年	2023 年	2024 年*
アンモニア	14,700	15,000	14,500	15,200	15,000
りん鉱石	22,700	22,600	22,800	23,300	24,000
加里	4,400	4,630	4,090	4,330	4,800

註： 表に記載しているアンモニア、りん鉱石と加里の数量は肥料用だけではなく、工業用途も含まれている。

*： 推定値

データ出所： USGS

表 7 は 2023 年世界のアンモニア生産量トップ 10 ヶ国を示す。

表 7. 2023 年アンモニア生産量トップ 10 の国とその生産量（万トン）

順位	国名	生産量
1	中国	4,700
2	インド	1,530
3	ロシア	1,400
4	アメリカ	1,380
5	インドネシア	580
6	サウジアラビア	540
7	エジプト	450
8	イラン	420
9	カナダ	341
10	トリニダード・トバゴ	322
10 ヶ国合計		11,663
世界生産量に占める割合		76.73%

データ出所： USGS

アンモニア生産量トップ 10 ヶ国はその生産量が世界生産量の 76.73% で、化学肥料 3 原料の中に集中程度が一番低い。これは、アンモニアの原料は天然ガスと石油、石炭で、産出国が多く、調達も容易であるため、りん鉱石と加里と異なり、需要地の近くにアンモニア工場を建設することは採算上有利である。

表 8 は 2024 年末現在、すでに判明された世界のりん鉱石資源量（現時点では商業的採掘価値があり、かつ採掘可能なりん鉱石資源量）トップ 10 ヶ国と 2023 年りん鉱石採掘量ト

ップ 10ヶ国の順位とその数量を示す。

表 8. 世界の商業的採掘可能なりん鉱石資源量トップ 10 の国と 2023 年りん鉱石採掘量トップ 10 の国 (万トン)

順位	国名	商業的採掘可能資源量	国名	2023 年採掘量
1	モロッコと西サハラ	5,000,000	中国	10,500
2	中国	370,000	モロッコと西サハラ	3,300
3	エジプト	280,000	アメリカ	1,960
4	チュニジア	250,000	ロシア	1,300
5	ロシア	240,000	ヨルダン	1,150
6	アルジェリア	220,000	サウジアラビア	990
7	ブラジル	160,000	ブラジル	528
8	南アフリカ	150,000	エジプト	500
9	オーストラリア	110,000	ペール	470
10	サウジアラビア	100,000	チュニジア	360
10ヶ国合計		6,880,000		21,058
世界全体に占める割合		92.97%		90.38%

註： 資源量と採掘量はすべて実量で、 P_2O_5 換算された数量ではない。

データ出所： USGS

2023 年のデータでは上位 10 国ケりん鉱石採掘量は世界採掘量の 90% を超え、資源量も 93% を占める。但し、りん鉱石資源量 6 位のアルジェリア、8 位の南アフリカ、9 位のオーストラリアは国内経済的または政治的な理由でりん資源の開発が非常に低調である。

りんは金属元素ではないため、磁力線や赤外線に反応せず、その鉱床を衛星などによるリモートセンシング探索が不可能である。また、石油や天然ガスのように人工的に起こした弾性波を利用して地下構造を調べる技術（地震波探索）も応用しにくい。従って、地球上のりん資源はまだ全貌が掴まっていない。将来には経済的採掘が可能となる世界のりん資源量は 3,000 億トンを超えると推定される。数百年の採掘に耐えるので、切迫したりん資源不足の可能性がない。

採掘されたりん鉱石の 90% 以上はりん酸（湿法りん酸と熱法りん酸）の製造に、残りは過りん酸石灰や熔りんのような低濃度りん酸肥料の生産に供される。なお、りん酸の約 90% はりん安など高濃度りん酸肥料の原料、10% は飼料や工業用りん酸塩の原料として使われる。

表 9 は 2024 年末現在、判明された世界の加里資源量（現時点では商業的採掘価値があり、かつ採掘可能の可溶性加里資源量）を有するトップ 10ヶ国と 2023 年加里生産量トップ 10ヶ国のリストである。

表 9. 世界の商業的採掘可能な加里資源量と 2023 年加里生産量トップ 10 の国（万トン）

順位	国名	資源量		2023 年加里生産量	
		商業採掘可能量	K ₂ O 換算量	国名	K ₂ O 換算量
1	カナダ	450,000	110,000	カナダ	1,350
2	ラオス	NA	100,000	ロシア	900
3	ロシア	NA	92,000	中国	600
4	ベラルーシ	330,000	75,000	ベラルーシ	450
5	イスラエル	NA	27,000	ドイツ	270
6	ヨルダン	NA	27,000	イスラエル	233
7	アメリカ	97,000	22,000	ヨルダン	170
8	中国	NA	18,000	ラオス	150
9	ドイツ	NA	15,000	チリ	60
10	チリ	NA	10,000	アメリカ	39
10ヶ国合計		496,000			4,222
世界全体に占める割合		>95%			97.51%

NA: データなし

データ出所: USGS

加里生産量トップの 10ヶ国は世界加里の 97.51%を生産し、K₂O 換算の資源量も世界加里資源量の 95%以上を占める。加里資源は少数の国々に偏っていることが明らかである。

また、すでに判明された商業的採算のできる可溶性加里資源量が 230 年以上の生産を維持できる。ほかに未究明の加里資源および不溶性加里資源などもあり、その資源量は少なくとも現時点で商業的採算性のある可溶性加里資源量の数倍～数 10 倍である。従って、少なくとも数百年の間に加里資源枯渇の可能性がない。

三、化学肥料生産能力と生産量に関するデータ

化学肥料の種類が多く、またメーカーが同じ生産ラインでもいろんな肥料を生産することがあり、肥料種類ごとにその生産能力と実生産量を把握するのは無理なことである。従って、国際的な慣習では、窒素肥料は N 換算でその総量を纏めるほか生産量と消費量の最も多い尿素だけを抽出して単独に表示することが多い。りん酸肥料も P₂O₅ 換算で総量を纏め、生産量と消費量の最も多い DAP と MAP 又はこの 2 項目を纏めてりん安として表示し、加里については、K₂O 換算でその総量のほか、塩化加里だけを別途で表示することが多い。

表 10 は 2019～2023 年世界の窒素、りん酸、加里生産能力と実生産量をそれぞれ N、P₂O₅、K₂O 換算で纏めたデータである。なお、当該データは肥料用途だけではなく、飼料用途や工業用途も含まれている。

表 10. 2019～2023 年世界の窒素、りん酸、加里生産能力と実生産量（万トン）

年度	窒素(N 換算)		りん酸(P ₂ O ₅ 換算)		加里(K ₂ O 換算)	
	生産能力	実生産量	生産能力	実生産量	生産能力	実生産量
2019 年	18,952.3	16,150.4	6,235.7	4,951.0	6,205.5	5,137.3
2020 年	18,735.4	16,049.2	6,261.2	5,052.0	6,646.7	5,275.2
2021 年	18,636.4	15,902.4	5,993.6	5,242.4	6,396.9	5,236.2
2022 年	19,069.1	15,682.8	6,171.3	5,134.2	6,328.2	4,674.7
2023 年	19,229.2	16,271.8	6,429.1	5,428.5	6,409.1	5,211.9

データ出所：IFA、FAO

2020～2022 年は新型コロナウイルスパンデミックの影響で、窒素、りん酸と加里の実生産量がやや減少したが、新型コロナが終息した 2023 年には急速に回復した。

表 11 は 2023 年窒素、りん酸、加里の生産能力を有するトップ 10 ヶ国とその生産能力である。

表 11. 2023 年窒素、りん酸、加里生産能力トップ 10 の国とその生産能力（万トン）

順位	窒素 (N 換算)		りん酸 (P ₂ O ₅ 換算)		加里 (K ₂ O 換算)	
	国名	生産能力	国名	生産能力	国名	生産能力
1	中国	5,671.7	中国	2,052.6	カナダ	2,301.2
2	インド	1,703.9	モロッコ	808.5	ロシア	1,159.0
3	ロシア	1,664.5	アメリカ	746.2	ベラルーシ	894.9
4	アメリカ	1,479.0	ロシア	418.2	中国	583.8
5	インドネシア	674.1	サウジアラビア	310.7	ドイツ	281.8
6	イラン	545.2	インド	257.0	イスラエル	268.4
7	サウジアラビア	535.2	チュニジア	212.3	ラオス	167.8
8	エジプト	513.0	ブラジル	162.1	ヨルダン	158.6
9	カナダ	447.1	ヨルダン	109.3	チリ	151.0
10	ウクライナ	446.5	メキシコ	87.8	トルクメニスタン	85.4
10 ヶ国合計		13,680.3	5,164.6		6,051.7	
世界全体に占める割合		71.14%	80.33%		94.50%	

データ出所：CRU

窒素生産能力トップ 10 ヶ国の合計は世界の窒素生産能力の 71%、りん酸生産能力トップ 10 ヶ国の合計は世界りん酸生産能力の 80%、加里生産能力トップ 10 ヶ国の合計は世界加里生産能力の 94%以上を占める。なお、NPK 三大養分合計での生産能力トップ 5 ヶ国は中国、ロシア、カナダ、アメリカ、インドの順で、この 5 ヶ国だけが世界の化学肥料生産能

力の 57.8%を占める。

四、世界の化学肥料需要量と実際の消費量に関するデータ

化学肥料需要量とは、農作物の栽培に予測した必要な化学肥料の数量で、計算上のデータである。消費量とは実際に農家に販売された化学肥料の数量である。通常、アフリカなど化学肥料が入手しにくい国と地域があるため、需要量が消費量を上回るはずだが、先進国では過剰施肥が多く見られて、実態では消費量が需要量を上回ることもある。なお、需要量と消費量が農地面積と栽培されている作物の種類、施肥習慣、気候などにより変動する。表 12 は IFA が予測した 2018～2023 年世界の化学肥料需要量、表 13 は IFA が発表した 2019～2023 肥料年度（当年 4 月～翌年 3 月の 12 ヶ月）世界全体の化学肥料消費量を示す。表 12 の年とはカレンダーに示す暦年で、表 13 の肥料年度は当年 4 月～翌年 3 月の 12 ヶ月を指すことと暦年ではないことを注意すべきである。

表 12. 2019～2023 年世界の化学肥料需要量（万トン）

年度	窒素肥料(N 換算)	りん酸肥料(P ₂ O ₅ 換算)	加里肥料(K ₂ O 換算)	NPK 合計
2019	10,742.4	4,658.7	3,797.1	19,198.2
2020	10,874.4	4,740.2	3,871.1	19,485.7
2021	11,075.8	4,339.7	3,930.0	19,345.5
2022	10,437.0	4,383.9	3,572.4	18,393.3
2023	11,314.0	4,580.2	3,746.3	19,640.5

データ出所： IFA

表 13. 2019～2023 肥料年度の世界化学肥料消費量（万トン）

肥料年度	窒素肥料(N 換算)	りん酸肥料(P ₂ O ₅ 換算)	加里肥料(K ₂ O 換算)	NPK 合計
2019～20	10,821.2	4,715.2	3,720.7	19,257.1
2020～21	11,139.4	4,870.5	4,014.4	20,024.3
2021～22	10,955.1	4,786.0	3,846.4	19,471.3
2022～23	11,012.0	4,480.2	3,460.0	18,510.2
2023～24*	11,341.5	4,645.6	3,788.0	19,775.1

* 2023～2024 肥料年度は推定値である。

データ出所： IFA

2020 年から始まった新型コロナウイルスの持続的なパンデミックの影響で、2021 年から化学肥料価格が高騰し、農家が肥料施用量を減らした結果、2021～2022 と 2022～2023 肥料年度の消費量が大幅に減少したが、新型コロナウイルスの脅威がなくなった 2023～2024 肥料年度の消費量が大幅回復された。

表 14 は 2021～2023 年世界の尿素生産量と肥料消費量、肥料以外の工業用途消費量のデータを示す。新型コロナの影響で、2021 と 2022 年は肥料消費量だけではなく、尿素生産量と工業用途の消費量も減少しているが、2023 年は新型コロナの終結で、実生産量と肥料消費量、工業消費量とも増加に転じた。

表 14. 2021～2023 年世界の尿素生産能力、実生産量と肥料消費量、工業用途消費量（万トン）

年	生産能力	実生産量	肥料消費量	工業等の消費量
2021 年	10,141.3	8,914.9	7,019.9	1,601.8
2022 年	10,286.4	8,412.0	6,942.5	1,469.4
2023 年	10,735.4	9,257.1	7,344.8	1,616.3

データ出所： IFA

表 15 は 2023 年肥料消費量トップ 10 ヶ国の消費量を示す。

表 15. 2023 年化学肥料消費量（N、P、K 別）トップ 10 の国（万トン）

順位	窒素肥料(N 換算)		りん酸肥料 (P ₂ O ₅ 換算)		加里肥料(K ₂ O 換算)	
	国名	数量	国名	数量	国名	数量
1	中国	2,688.3	中国	1,023.8	中国	878.1
2	インド	2,075.0	インド	720.0	ブラジル	723.9
3	アメリカ	1,164.3	ブラジル	700.9	アメリカ	440.8
4	ブラジル	520.6	アメリカ	407.4	インド	228.7
5	パキスタン	382.0	インドネシア	133.0	インドネシア	230.6
6	インドネシア	352.2	パキスタン	125.7	マレーシア	140.1
7	カナダ	327.8	カナダ	121.3	ベトナム	59.3
8	ロシア	294.5	ロシア	112.8	ロシア	52.2
9	フランス	197.5	バングラデシュ	87.5	カナダ	47.9
10	トルコ	192.5	オーストラリア	87.4	ポーランド	47.8
トップ 10 国合計		8,194.9	3,520.2		2,849.4	
世界全体に占める割合		72.26%	75.77%		75.22%	

データ出所： CRU

表 15 に示すように、トップ 10 ヶ国の肥料消費量が世界肥料消費量に占めるシェアは窒素肥料では約 72%、りん酸肥料では約 76%、加里肥料では約 75% である。すなわち、3/4 以上の肥料がこの 10 ヶ国に消費され、残りの約 180 の国と地域は世界肥料消費量の 1/4 にもならない。従って、発展途上国の経済発展に伴い、世界の化学肥料消費量が増える余地が充分ある。

六、化学肥料の国際貿易（輸出／輸入）に関するデータ

化学肥料は化学工業の一分野として、各国の資源量、経済発展状況、化学工業の発展水準、農業生産現代化の度合いなどによりその国の化学肥料生産量と消費量が支配されている。すなわち、化学肥料の生産と消費が別々のことである。特にりんと加里が資源の偏りがあり、りん酸肥料と加里肥料の生産が特定の地域や国に集中し、生産した製品が大量に輸出している。一方、多くの国は資源不足または化学工業の発展不十分により、国内生産量が需要に満たされず、輸入に依存する。

表 16 は 2019～2023 年世界のアンモニアと尿素の国際貿易に関するデータである。表 17～20 は 2021～2023 年世界のアンモニアと尿素の輸出／輸入トップ 10ヶ国とその輸出／輸入量を示す。

表 16. 2019～2023 年アンモニアと尿素の国際貿易量（実物量、万トン）

項目	2019 年	2020 年	2021 年	2022 年	2023 年
アンモニア	1,982.3	1,841.9	1,920.9	1,710.8	1,596.5
尿素	5,039.3	5,203.2	5,238.8	5,373.3	5,398.5

データ出所： CRU

尿素に比べ、アンモニアの国際貿易量が少ない。その理由はアンモニアが液体で、危険物にも指定され、海上輸送などは不便であるうえ、厳しく規制されている。窒素肥料用途ならば、固体の尿素を輸出した方が手間と費用が省く。

表 17. 2021～2023 年世界アンモニア輸出トップ 10 の国と輸出量（実物量、万トン）

順位	2021 年		2022 年		2023 年	
	国名	輸出量	国名	輸出量	国名	輸出量
1	ロシア	442.4	トリニダード	360.2	トリニダード	369.3
2	トリニダード	391.2	サウジアラビア	264.7	サウジアラビア	243.0
3	インドネシア	173.0	インドネシア	192.9	インドネシア	171.0
4	アルジェリア	136.4	アルジェリア	131.0	アメリカ	112.0
5	サウジアラビア	124.1	カナダ	114.5	カナダ	105.0
6	カナダ	122.8	アメリカ	92.5	アルジェリア	97.5
7	カタール	57.9	ロシア	78.5	イラン	62.0
8	エジプト	54.9	イラン	55.6	カタール	52.3
9	イラン	54.1	エジプト	55.2	エジプト	49.0
10	アメリカ	35.2	カタール	51.3	ロシア	46.3
上位 10ヶ国合計		1,591.7		1,396.4		1,307.4
世界輸出量に占める割合		99.70%		81.62%		81.89%

データ出所： CRU

アンモニア輸出トップ 10ヶ国はすべて石油や天然ガスの資源大国である。原料を確保しやすく、生産コストが抑えられ、アンモニアの大量生産に適している。

表 18. 2021～2023年世界アンモニア輸入トップ 10 の国と輸入量（実物量、万トン）

順位	2021年		2022年		2023年	
	国名	輸入量	国名	輸入量	国名	輸入量
1	アメリカ	260.0	アメリカ	228.9	インド	233.7
2	インド	232.8	インド	228.0	アメリカ	209.0
3	モロッコ	172.5	モロッコ	196.7	モロッコ	165.9
4	韓国	140.1	韓国	138.7	韓国	123.0
5	ベルギー	93.7	ベルギー	80.3	トルコ	82.8
6	トルコ	85.3	トルコ	74.4	ベルギー	69.8
7	中国	80.9	台湾	50.9	中国	69.3
8	ノルウェー	66.8	ノルウェー	48.7	台湾	20.6
9	台湾	62.5	フランス	39.4	ノルウェー	43.6
10	フランス	63.1	中国	23.0	フランス	43.1
上位 10 か国合計		1,257.7		1,108.9		1,090.9
世界輸入量に占める割合		65.47%		64.82%		68.33%

データ出所： CRU

トップ 10ヶ国のアンモニア輸入量が世界アンモニア貿易量の約 65%を占める。ただし、アメリカのシェルガス開発により、2015年から国内数か所にシェルガスを原料とするアンモニア／尿素プラントの新規建設が開始し、アンモニアと尿素の輸入量が逐年減少していく見込みである。その代わりにインドが国内食糧生産の重視、中国が国内カプロラクタム生産能力の急増、モロッコがりん安肥料生産能力の増強により、アンモニア使用量が増加し、輸入量も増加してきた。

表 19. 2021～2023年世界尿素輸出量トップ 10 の国とその輸出量（万トン）

順位	2021年		2022年		2023年	
	国名	輸出量	国名	輸出量	国名	輸出量
1	ロシア	696.1	ロシア	824.7	ロシア	854.4
2	中国	529.9	カタール	556.1	カタール	530.7
3	カタール	526.9	イラン	503.7	イラン	483.4

4	エジプト	455.9	サウジアラビア	449.3	エジプト	469.7
5	サウジアラビア	413.6	エジプト	445.9	中国	425.5
6	イラン	378.0	オマーン	326.5	サウジアラビア	412.2
7	オマーン	324.1	アルジェリア	312.9	アルジェリア	323.1
8	アルジェリア	311.8	中国	283.1	オマーン	284.5
9	マレーシア	170.9	ナイジェリア	249.7	ナイジェリア	225.0
10	ナイジェリア	132.3	マレーシア	205.2	マレーシア	189.8
合計		3,939.4		4,157.2		4,198.4
世界輸出量に占める割合		75.20%		77.37%		77.77%

データ出所： CRU

尿素輸出については、ロシア、中東湾岸と北アフリカ諸国が主力である。中国は生産能力と実生産量が世界 1 位だが、国内需要量が多く、輸出の余力が多くないうえ、政府の尿素輸出管理が厳しくて、年によって輸出数量の変動が激しい。

表 20. 2021～2023 年世界尿素輸入量トップ 10 の国とその輸入量（万トン）

順位	2021 年		2022 年		2023 年	
	国名	輸入量	国名	輸入量	国名	輸入量
1	ブラジル	787.3	インド	941.8	インド	740.6
2	インド	701.9	ブラジル	709.2	ブラジル	731.2
3	アメリカ	608.7	アメリカ	501.2	アメリカ	497.9
4	オーストラリア	270.5	オーストラリア	289.3	トルコ	338.5
5	トルコ	250.3	トルコ	292.4	オーストラリア	319.5
6	タイ	212.5	タイ	212.4	タイ	268.9
7	メキシコ	158.8	メキシコ	142.4	メキシコ	189.3
8	南アフリカ	143.7	フランス	146.2	南アフリカ	132.3
9	フランス	114.1	カナダ	119.2	フランス	125.5
10	カナダ	86.0	南アフリカ	122.3	カナダ	108.9
合計		3,333.9		3,476.3		3,452.6
世界輸出量に占める割合		63.64%		64.70%		63.95%

データ出所： CRU

インド、ブラジルとアメリカは尿素輸入国 のトップ 3 である。この 3ヶ国だけで国際尿素輸入量の 40%以上を占めている。その原因是穀物と油料作物の生産大国で、農作物の栽培面積が広く、窒素肥料の需要も多い。国内の尿素生産量が多いが、それでも満たされず、

不足分が輸入に依存することである。

りん酸肥料については、過りん酸石灰や熔りんのような低濃度りん酸肥料は主に産地（工場所在地）の周辺で消費され、輸出は主にりん安（DAP と MAP）である。表 21 は 2019～2023 年世界のりん安（DAP+MAP）貿易量を示す。また、表 22 と 23 は 2021～2023 年りん安の輸出／輸入トップ 10 の国とその輸出／輸入量を示す。

表 21. 2019～2023 年りん安（DAP+MAP）の国際貿易量（万トン）

項目	2019 年	2020 年	2021 年	2022 年	2023 年
りん安	3,009.7	3,170.7	3,108.1	2,625.7	2,866.7

データ出所： CRU

表 22. 2021～2023 年りん安（DAP+MAP）の輸出トップ 10 ヶ国とその輸出量（万トン）

順位	2021 年		2022 年		2023 年	
	国名	輸出量	国名	輸出量	国名	輸出量
1	中国	986.2	モロッコ	615.1	モロッコ	717.1
2	モロッコ	670.3	中国	572.4	中国	692.6
3	サウジアラビア	467.2	ロシア	460.5	サウジアラビア	502.9
4	ロシア	402.7	サウジアラビア	455.4	ロシア	445.5
5	アメリカ	231.7	アメリカ	283.0	アメリカ	235.6
6	ヨルダン	80.7	ヨルダン	61.2	ヨルダン	66.2
7	オーストラリア	46.5	オーストラリア	38.0	チュニジア	54.1
8	メキシコ	40.4	メキシコ	32.6	オーストラリア	31.5
9	チュニジア	39.6	チュニジア	28.1	エジプト	22.6
10	カザフスタン	30.0	カザフスタン	20.0	メキシコ	21.4
合計	2,995.3		2,566.3		2,789.4	
世界輸出量に占める割合	96.37%		97.74%		97.30%	

データ出所： CRU

りん安の国際貿易について、輸出トップ 5 ヶ国が全輸出量の 86～87%、トップ 10 ヶ国が全輸出量の 96～98%を占める。これはりん資源が特定の国に偏在しているためである。

表 23. 2021～2023 年りん安（DAP+MAP）の輸入トップ 10 の国とその輸入量（万トン）

順位	2021 年		2022 年		2023 年	
	国名	輸入量	国名	輸入量	国名	輸入量
1	ブラジル	645.1	インド	727.2	インド	739.8

2	インド	484.4	ブラジル	439.5	ブラジル	582.1
3	アメリカ	235.4	バングラデシュ	163.8	アメリカ	250.9
4	カナダ	182.8	カナダ	155.4	カナダ	168.5
5	バングラデシュ	181.7	オーストラリア	124.7	オーストラリア	140.4
6	オーストラリア	146.5	アメリカ	110.1	バングラデシュ	119.6
7	アルゼンチン	136.9	アルゼンチン	100.4	アルゼンチン	110.3
8	パキスタン	124.5	パキスタン	58.3	パキスタン	68.9
9	メキシコ	58.6	ベトナム	55.5	メキシコ	67.8
10	ベトナム	57.8	日本	50.2	トルコ	66.8
合計		2,253.7		1,985.1		2,3150
世界輸入量に占める割合		72.51%		75.60%		80.75%

データ出所：CRU

輸入については、インドとブラジルの2国だけで世界りん安輸入量の約半分、トップ5ヶ国が全輸入量の65~70%、トップ10ヶ国が全輸入量の70~80%を占める。但し、アメリカはりん安を多量に輸出する一方、多量のりん安も輸入している。すなわち、世界のりん安貿易が主に中国、モロッコ、サウジアラビアとロシアの輸出とインドとブラジルの輸入を軸に動いている。

世界の塩化加里貿易状況は表24~26に示す。なお、硫酸加里やりん酸加里、硝酸加里などその他の加里肥料の貿易量が合わせても塩化加里貿易量の5%にも満たないため、表に取り上げない。

表24. 2019~2023年塩化加里の国際貿易量（万トン）

項目	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年
塩化加里輸出量	4,924.7	5,605.6	5,706.0	4,492.1	5,431.2

データ出所：CRU

表25. 2021~2023年世界の塩化加里輸出トップ10の国とその輸出量（万トン）

順位	2021年		2022年		2023年	
	国名	輸出量	国名	輸出量	国名	輸出量
1	カナダ	2,200.8	カナダ	2,100.5	カナダ	2,238.3
2	ベラルーシ	1,234.3	ロシア	716.3	ロシア	978.2
3	ロシア	1,140.9	ベラルーシ	478.3	ベラルーシ	903.2
4	イスラエル	350.4	イスラエル	351.0	イスラエル	367.0
5	ドイツ	322.0	ドイツ	324.1	ドイツ	313.3

6	ヨルダン	240.1	ヨルダン	240.5	ヨルダン	268.3
7	ラオス	78.2	ラオス	135.2	ラオス	248.3
8	チリ	62.3	チリ	59.5	スペイン	49.6
9	スペイン	45.5	スペイン	57.7	チリ	36.9
10	ウズベキスタン	24.3	ウズベキスタン	19.2	ウズベキスタン	18.7
合計		5,698.8		4,482.2		5,421.6
世界輸出量に占める%		99.87%		99.78%		99.82%

データ出所：CRU

加里資源の偏りにより、塩化加里を輸出できる国は 10 数か国しかない。カナダ、ベラルーシ、ロシア、イスラエル、ヨルダン、ドイツの上位 6 ヶ国が世界の塩化加里輸出量の 95% 以上を占める。これは、加里資源量の多寡によるものである。7 位のラオスは 2018 年から初めて加里輸出国に加わったが、輸出量の増加スピードが早く、2020 年からずっと第 7 位の輸出国を維持している。

表 26. 2021～2023 年世界の塩化加里輸入トップ 10 の国とその輸入量（万トン）

順位	2021 年		2022 年		2023 年	
	国名	輸入量	国名	輸入量	国名	輸入量
1	ブラジル	1,255.5	ブラジル	1,106.6	ブラジル	1,316.8
2	アメリカ	1,020.3	中国	803.0	中国	1,122.5
3	中国	745.3	アメリカ	735.1	アメリカ	886.3
4	インドネシア	421.9	インドネシア	279.5	インド	324.7
5	インド	312.7	インド	260.6	インドネシア	248.8
6	マレーシア	198.7	マレーシア	123.9	マレーシア	146.7
7	ベトナム	114.6	バングラデシュ	88.7	バングラデシュ	117.6
8	ベルギー	101.4	タイ	72.2	ベトナム	97.2
9	タイ	99.5	ベトナム	67.0	タイ	77.1
10	バングラデシュ	98.8	ベルギー	61.9	ベルギー	74.0
合計		4,369.3		3,598.4		4,411.7
世界輸入量に占める割合		76.44%		80.11%		81.23%

データ出所：CRU

加里の輸入国は 100 か国以上だが、ブラジル、アメリカ、中国、インド、インドネシアの 5 ヶ国だけで世界の塩化加里輸入量の 65% を超えた。これも耕地面積と栽培作物種類に関連している。

最後に 2001～2022 年アンモニア、尿素、DAP、粗りん酸、塩化加里の国際市場に於ける

年間平均価格に関するデータを提供する。

表 27. 2001～2023 年国際市場に於ける一部の肥料原料と化学肥料の年間平均価格（米ドル／トン）

年	アンモニア		尿素		DAP FOB ノラ	粗りん 酸 CFR インド	塩化カリ		
	FOB 黒海	CFR タンパ	FOB 中東	FOB ノラ			CFR ブ ラジル	CFR 中国	CFR インド
2001	130	178	117	149	199	349	140	115	121
2002	114	121	113	127	168	338	136	114	119
2003	186	190	154	190	187	341	143	119	121
2004	257	255	195	225	228	384	163	150	162
2005	270	289	242	284	253	426	216	212	210
2006	280	339	235	255	256	454	199	220	220
2007	279	325	317	381	432	533	273	235	249
2008	522	462	522	557	915	1,714	775	508	540
2009	248	429	275	303	323	619	635	587	523
2010	361	408	307	347	509	742	399	350	382
2011	509	575	438	471	617	994	521	435	417
2012	572	605	396	523	539	909	513	470	480
2013	499	543	347	376	456	715	404	400	424
2014	519	545	327	392	489	715	350	310	335
2015	414	454	279	317	458	799	325	313	329
2016	265	276	205	228	349	626	232	269	277
2017	287	277	230	228	356	566	263	224	232
2018	307	312	273	285	435	732	320	246	257
2019	243	247	260	270	339	691	330	290	288
2020	229	233	249	250	343	628	238	243	248
2021	567	595	515	536	664	1,073	534	244	290
2022	991	1162	674	665	848	1,541	857	550	573
2023	433	513	350	392	604	963	392	429	430

データ出所： CRU、EIA など

2020 年から始まった新型コロナウイルスの持続的なパンデミックの影響で、2021 年から化学肥料価格が高騰し、2022 年に最高値を記録した。2023 年から各国が新型コロナの危険性を過大視せず、その対策を大幅に緩和した関係で、高騰した化学肥料価格が大幅に下落

した。ただし、それでも新型コロナの前より大幅に上がった。